石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第413号　平成30年3月1日発行

特別陳列 加賀藩の美術工芸【前田育徳会尊經閣文庫分館】

清水九兵衛　《巌浪蒔絵真鳥羽箪笥》　江戸17世紀
前田育徳会蔵

古九谷・再興九谷名品選【第２展示室】

写真と幻想【第３展示室】

明治の工芸【第５展示室】

- ３月の企画展示室
- 展覧会回顧
- ミュージアムレポート
- ３月の行事予定
- アラカルト　ただいま展示中

吉川恍陽　《時の壁》

第2展示室
古九谷・再興九谷名品選

特別陳列
加賀藩の美術工芸

2月9日（金）～3月21日（水・祝）　会期中無休

前号では、本展の最大の見所である重文《閑居友》と重文《荏柄天神縁起絵巻》巻中をご紹介しましたので、今回はその他の出品作品をご紹介します。まず絵画では周文筆と伝えられる《秋冬山水図》（六曲一隻のほう）と、加賀に生まれ、加賀藩の御用を務めた佐々木泉景の《寿老・鶴図》を展示します。そして工芸は、漆芸から加賀蒔絵の粋を極めた清水九兵衛の《巌浪蒔絵真鳥羽箪笥》、五十嵐道甫作と伝わる《黒塗布目引出絵替絵具箪笥》、そして加賀藩五代藩主・前田綱紀のモットーを表象した《青貝敬字箪笥》などを展示します。染色からは、加賀友禅の絵画的特質を余すところなく伝える《桃花美人図》を、また金工からは加賀象嵌の代名詞ともいえる鐙から「氏政作」の銘がある《雪降竹銀象嵌鐙》と、無銘の《障子文金銀象嵌鐙》を展示します。さらに同時に開催している第二展示室の特集「古九谷・再興九谷名品選」に関連して、《古九谷色絵中皿》五枚を展示します。色絵（五彩手）、赤絵の展開など、九谷焼の流れを概観する際に極めて重要な示唆を与える作品として、あわせてご覧いただきたいと思います。

このように加賀藩の美術工芸は、文武二道観から「文による武」としての戦略的意図をもって名品の収集や名工の招聘、新たな表現様式やジャンルの開拓などに強い独自性を打ち出しています。《荏柄天神縁起絵巻》巻中の「清涼殿襲撃」の場面を見ると、加賀藩主・前田家の文化に注いだエネルギーの源泉を、戦慄をもって実感することができるようです。

今日伝存する古九谷が、加賀でいつ頃まで生産されたのかという問題は慎重に考察する必要があります。そして近年の九谷周辺の発掘成果は、色絵磁器のプロジェクトを構想した加賀藩三代藩主・前田利常の没年である一六五八年と、利常の三男で、プロジェクトの実質的な推進者だった大聖寺藩初代藩主・前田利治の没年である一六六〇年あたりに、大きな転換点があったことを示唆しているようです。

さらに、加賀藩五代藩主・前田綱紀が一六九五年に茶碗、皿、鉢類を伊万里に注文している事実も注目されます。つまり綱紀が編集した「百工比照」に、当時国内最先端の工芸技術だった色絵磁器の標本が収録されていないこととあわせて、綱紀の晩年には加賀の地で安定的に色絵磁器を生産することができなかったと考えられるのです。一八〇七年に生産を開始する春日山窯が開窯に至った理由が、当時加賀地方において藩民が用いる日用雑器は肥前や京から買入れており、そのため大量の藩金が藩外に流出することの抑止策だったことを考えると、色絵磁器を藩内で生産できない状況は一世紀以上続いたことがわかります。

春日山窯が京都から招かれた青木木米と、肥前・島原出身の本多貞吉によって推進されたことを考えると、彼らは古九谷再興の気概に燃えていたのではないでしょうか。同時にその点が、殖産興業を前提とする藩の方針と乖離していったようです。しかし木米は京都に帰りますが、加賀に残った貞吉の思いは築窯や製陶の技術とともに、再興九谷諸窯の芸術性の根幹となりました。

《色絵象人物図角皿》　吉田屋窯
1824年～31年

《青貝敬字箪笥》　江戸17～18世紀
前田育徳会蔵

第3展示室

写真と幻想

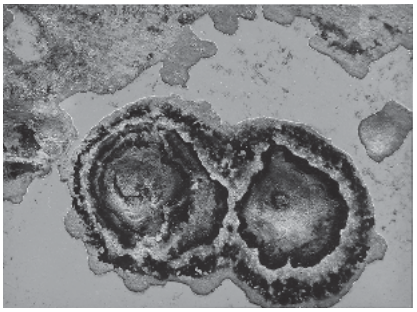
2月9日（金）～3月21日（水・祝）　会期中無休

本展は石川県立美術館初の本格的写真展であり、開催前から多くの反響をいただいてきました。展示では「幻想」をひとつのキーワードとして、既に鬼籍に入られた三名の石川の写真家に焦点をあてました。生年にはそれぞれ開きがありますが、どの作家も個性豊かであり、興味深く鑑賞できます。今号では、その三者三様の魅力をご紹介します。

大正三年（一九一四）の生まれの吉川恍陽は、石川の現代写真初期を代表する作家です。その前期を代表するのが、被写体に石川門を選び構成したモノクローム作品です。城門の乳鋲という、歴史的遺物の被写体と現代美術的な表現とのマッチングが絶妙です。その制作は、やがて金属板や布を自ら構成して撮影する、構成主義的な作風へと昇華します。

昭和五年生まれの冨岡省三は、五十代に入ってから精力的に制作を始めた作家です。初期の風景写真から、晩年の錆をクローズアップした作品まで、徹底して実像を追う冨岡のファインダーは、独自の世界を現出させました。人造の塗料を侵食する錆が生み出す文様は、そこに自然の摂理を見ることができます。

三名の中で最も若い河野安志は、昭和三十六年生まれ。フォトモンタージュ（コラージュ）に手彩色を加える手法で、現代をシュルレアリスティックな切り口で見せています。人物や物、風景は現実にはあり得ない大きさや、位置関係で超現実的な世界を表します。そこから生まれる視覚的な不安感は、鑑賞者を幻想的な世界へと引き込むのです。



冨岡省三　《船体の錆》　小松市博物館蔵

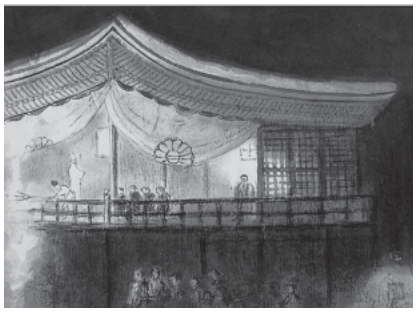
第4・6展示室［絵画・彫刻］

優品選

年初からの白銀の景色から、春の兆しも感じられるようになるこの時期、近現代の絵画・彫刻部門は、第3展示室の特集「写真と幻想」に併せ、第6室では、日本画と版画素描の優品を、第4展示室では、洋画・彫刻の優品をご覧いただきます。以下で代表作を紹介します。

第6展示室の黒田櫻の園《御水送り神事》は、春の訪れを告げる奈良の御水取りに先立ち、若狭から東大寺二月堂にお香水を送るという天平時代以来の伝統を誇る神事の様子を、墨の濃淡を利かせ洒脱に表し、古代の歴史ロマンを掻き立ててくれるこの時期ならではの作品です。

第4展示室では、本県ゆかりの作家による、人物表現をテーマとする重厚な作品をご堪能いただきます。人間表現の作品評ではよく「光と影」が目につきます。人生には華やかさの反面、暗い部分もあり、理想や夢と現実との葛藤が交錯し人間ドラマが展開します。鴨居玲《酔っぱらい》は、飲酒で現実逃避する老人像で、人生の闇への眼差しを逸らすことがなかった鴨居の生き様を示しながら、ユーモラスな人間愛も感じさせる作品です。宮本三郎《熱叢夢》はギリシア神話を題材に溢れんばかりの光とカラフルな色彩に包まれた裸女を描くものです。作品は既存の神話から跳躍し南国の熱気と生命感を発揮しています。吉田三郎《波》は大空に躍動するかのような男性像です。激しいポーズとシャープなフォルムは、人体の美しさとともに空間造形のダイナミックさを示しています。



黒田櫻の園《御水送り神事　だったん行法》

第5展示室

明治の工芸

2月9日(金)～3月21日(水・祝)　会期中無休

明治時代の漆工芸には絵画のように、壁面装飾として作られた額や壁掛があり、石川県立美術館にも何点か所蔵されています。今回展示する作品の一つは、洒脱なデザインと巧みな技術により幕末から明治にかけて活躍し、帝室技芸員にも任命された柴田是真の「蒔絵蕗に小鳥図額」です。

黒漆のマットな表面に、黒と金の高蒔絵で一株の蕗の根元に寄り添う二羽の小鳥を表しています。空間を多くとった緊張感のある構図、塗の技法を巧みに使い分けた表現は、今見ても新鮮な印象です。是真は額も自作しており、シンプルなデザインとも調和しています。是真は十一歳で古満寛哉に弟子入りし蒔絵の技法を習得した後、絵師の鈴木南嶺や岡本豊彦に師事しており、最初に絵画で高い評価を得ました。当時行われなくなった漆塗の技術の復興や、新しい技術の開発を行い、こうした技術を駆使し優れた作品を残しました。当時は分業であった漆工品の制作において、下絵から下地作り、蒔絵までの全工程をすべて自ら行った是真は、近代工芸作家の嚆矢と言えるでしょう。

是真は内外の博覧会に出品し、明治政府の殖産興業政策にも大いに貢献しましたが、本作は第一回内国勧業博覧会出品作です。これに加えて、是真の高弟で同じく帝室技芸員に任命された池田泰真「蒔絵桜花に棚図額」、是真の次男で画家としても活躍した柴田真哉「蒔絵釣灯籠図額」三点を含む、計四点の漆額、いずれも内国勧業博覧会出品作を展示します。

柴田是真　《蒔絵蕗に小鳥図額》

企画展Topics

石川県立美術館開館35周年
金沢美術倶楽部創立100周年記念特別展

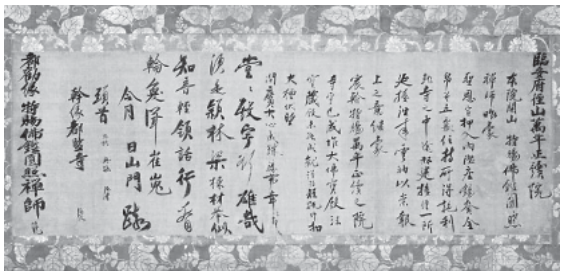
美の力

会期：4月1日(土)～5月20日(日)

江戸時代、加賀藩主・前田家は江戸幕府に対して文化による地域の独自性を打ち出し、名品の収集や名工の招聘・支援による美術工芸の振興など様々な政策を展開しました。この体制は明治維新により一時揺らぎましたが、石川県が継承しました。

こうして藩政期からの美意識を継承した「加賀百万石」のブランドイメージが形成され、今日地域の大きな魅力となっています。しかし、そこには明治、大正、昭和の時代にこの地の経済を牽引した、いわゆる旦那衆の尽力があったことを忘れることはできません。「加賀百万石」ブランドの担い手としての旦那衆の気概が茶の湯の振興を支え、地元美術商の協力のもとに、幕末以降に加賀の地から流出した美術工芸品が買い戻され、さらには当地との関わりを越えた歴史的名品も集積されていきました。その一部は寄贈、購入により石川県立美術館の重要なコレクションとなっています。

今回の展覧会は、石川県立美術館開館三十五周年と金沢美術倶楽部創立一〇〇周年を記念して、美に殉じた千利休の姿勢が藩祖・前田利家以後の文化観を方向付けたとの新たな観点から加賀文化を再考するとともに、それが今日発展的に継承されている一翼を担った明治時代以後の数寄者や美術商の活動もふりかえることを趣旨とします。国宝四点、重要文化財三十四点を含む、近年公開されることがなかった茶道美術を中心とした逸品の数々の「奇跡の邂逅」にどうぞご期待ください。



国宝《無準師範墨蹟「山門疏」》　五島美術館蔵

三月の企画展示室

第8・9展示室

’17玄土社書展

3月17日(土)～19日(月)　会期中無休

玄土社の二〇一七年中の歩みをまとめた創作(抽象)四十三点、古典臨摹(写し)は二十一点をお目にかけます。

創作は自由にチャレンジ精神をもって、臨摹は古典に忠実に。この玄土社の基本姿勢はかわることなく今展で四十五回となります。表意文字である漢字、その古典の模写復元を試みることで本当の歴史が見えてきます。また一方では揺れ動き進化する抽象表現の愉しさ。どちらも私たちにとって欠くことのできないワークです。独自の活動をする在野のグループ玄土社ならではの古典と新しい表現の世界をご覧いただける好機会です。

◆入場無料

表立雲トークタイム「『張遷碑』の資料蒐集について」

◆日　時／三月十八日(日)午後一時三十分～三時

◆連絡先／玄土社本部(表)　金沢市本多町一－七－十五

電話：〇七六－二六三－三七三〇

第8・9展示室

第24回　北陸国展

3月2日(金)～6日(火)　会期中無休

北陸国展は北陸在住者とゆかりのある国展出品者等で構成され、今年で二十四回展となりました。

国画会(国展)は昨年九十一回を迎え、毎年春に国立新美術館で開催される歴史ある公募団体です。草創期の絵画部には梅原龍三郎、香月泰男らが、写真部には野島康三、木村伊兵衛らがいました。

北陸国展での成果が国展での受賞者輩出につながっています。今回は絵画部二十五名、写真部二十六名が力作、大作を発表します。是非ご高覧下さいますようお願い申し上げます。

◆入場無料

◆後　援／北國新聞社、テレビ金沢

◆連絡先／横江昌人(北陸国展事務局)

能美市秋常町ニ五－一

第7展示室

第41回　伝統九谷焼工芸展

3月2日(金)～18日(日)　会期中無休

昭和五十一年に認定された石川県指定無形文化財保持団体九谷焼技術保存会が、技術保存・発展向上を図るための事業として毎年行っている公募展で、入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

◆観覧料／一　般：三五〇円(二八〇円)

大学生：二八〇円(二二〇円)

高校生以下無料

※(　)内は二十名以上の団体料金。当館友の会会員は、会員証の提示により団体料金になります。

◆連絡先／能美市泉台町南十三番地　石川県九谷会館内

九谷焼技術保存会事務局

電話：〇七六一－五七－〇一二五

展覧会回顧

森羅万象をまとう ―友禅 人間国宝 木村雨山・二塚長生の仕事―

会期　1月4日（木）～2月12日（月・休）

本展は木村雨山と二塚長生、物故者と現在制作を続けている作家という、作品の制作時期が異なる、石川県ゆかりの二人の重要無形文化財「友禅」保持者の作品を紹介することで、両作家の業績はもとより、絵画的と称される加賀の手描き友禅について、理解を深めていただくことを目的としたものです。

東京国立近代美術館をはじめとする、両作家の主要な作品の所蔵館からご出品いただいたことで、木村の回顧展としては、昭和四十七年に北陸放送大ホールで行われた展示以来の出品数であり、二塚については初期作品と現在の作品を併せて展示した、公立美術館における初の展覧会となりました。着物に興味のある方のみならず、着物に関わる仕事に従事する方々からも、これだけ観ることができると思わなかったとのお声をいただきました。遠方から観に来られた方も多く、記録的な寒波と積雪が重なりましたが、一月四日の初日、七日の工芸技術記録映画上映会とトークショー、二十一日のスライド上映による作品解説にも多くの方にご参加いただきました。

染織は工芸作品の中でも特に脆弱な素材です。木村の初期作品には扱いに特に注意が必要なものも、すでに行方が分からなくなった作品もあります。平成二十二年に二塚が重要無形文化財「友禅」保持者の認定を受けて、石川県で二人目の友禅の人間国宝が誕生し、木村の没後四十年を迎えた節目の時期だからこそ、関係者の方々から多大なご協力を賜り、貴重な作品を一堂に集めた展覧会の開催が可能であったと感じています。

森羅万象をまとう 上映会&トークショー・展示作品解説

企画展「森羅万象をまとう」の関連行事として、一月七日（日）に映画上映会&トークショーが、一月二十一日（日）に二塚長生氏による展示作品解説が行われました。

七日の上映会では、文化庁が制作した工芸技術記録映画「友禅・二塚長生のわざ」を上映し、その後、ゲストに二塚氏と同映画の監督である桜映画社の井上実氏をお迎えし、友禅についてのお話や、撮影にまつわる様々なエピソードをお聞きしました。二塚氏は、撮影に合わせて作業をしなければならなかったため、集中力を維持するのが大変だったが、最後に美しくライトアップされた作品を見て晴れがましさを感じられたそうです。また井上監督は、長期間にわたる撮影を通して、二塚氏と親しくさせていただいたが、気安くなりすぎないように常に心掛けていた、とのことです。

上映会&トークショー

二十一日の作品解説では、作品の画像を見ながら、木村雨山氏の思い出や作品の技法、さらには制作に対する姿勢などをお話いただきました。木村氏の作品の中で一つ選ぶとしたら、という質問に対しては、《友禅訪問着　花（木蓮）》を挙げられ、つぼみから満開にいたる木蓮の花の儚い美しさが、写生をもとに十分に表現され、能衣装を思わせる片身替りの意匠と調和していると述べておられました。

展示作品解説

ミュージアムレポート

友禅作家に挑戦

新春企画展「森羅万象をまとう　友禅人間国宝　木村雨山・二塚長生の仕事」の第8展示室の前に、「友禅作家にチャレンジ！」というコーナーを設けてあったのをご存知でしょうか？着物の型が描かれた備え付けの紙に、ブロッククレヨンで着物のデザイン画を描いていただく活動です。企画展では、子どもたちに興味を持って展示をみてもらうため、子ども用パンフレットを作成し、受付で渡しています。今回はパンフレットでの作品鑑賞とこのような体験活動を交えた活動で、展覧会を楽しんでもらおうと、この「友禅作家にチャレンジ！」を企画しました。とはいえ展覧会を楽しんでいただきたいのは、子どもたちだけではありません。このような参加型のコーナーには、大人の方も関心を示してくださることも多く、どなたでもご参加できるコーナーとしました。

集まった作品は子どもたちから、大人まで、そして、外国人の方の作品とバラエティに富んでいます。本展覧会の会期は記録的な大雪となりましたが、この体験コーナーの作品が掲示されるボードは、毎日のように作品が増えていく人気のコーナーとなりました。このようにたくさんの方が、木村雨山、二塚長生両作家の作品に触発され「友禅作家にチャレンジ！」してくださった源は、やはり、両作家の作品の持つ魅力と改めて感じた活動でした。

3月の行事予定

■土曜講座　午後1時30分～　美術館講義室　聴講無料

3日(土)　石川の文化財6　谷口　出

10日(土)　近代日本と彫刻　北澤　寛

■キッズ★プログラム　鑑賞講座「コラージュを楽しもう」
午後1時30分～3時　2階コレクション展示室

4日(日)　写真を貼付けて画面を作ったコラージュ作品の鑑賞と自分を主人公にした作品の制作をします。
対象：小学生親子
参加無料（子どもと保護者2名まで）、当日先着10組

■第2回 修復工房セミナー　午後1時30分～　美術館ホール　聴講無料

11日(日)　演題「文化財（美術工芸品）を守る
―文化財保存・修復の現状と課題―」
講師　地主智彦 氏（文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官）

■展示室でスケッチGO！　午後1時～3時　2階コレクション展示室

17日(土)　展示室でお気に入りの作品を、磁気式ボードを使ってスケッチ！
※観覧料を団体料金に割引します。

次回の展覧会

前田育徳会尊経閣文庫分館	第2展示室
名物裂と茶道美術 3月26日(月)～4月15日(日)　会期中無休	茶道美術名品選Ⅰ
第3～9展示室	
第74回現代美術展 3月29日(木)～4月15日(日)　会期中無休	

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.28

《色絵鹿図呉須赤絵写鉢》 春日山窯（裏銘：春日山）

口径28.0、底径16.8、高11.5（cm） 1807年～20年頃

文化二年（一八〇五）、加賀藩の家柄町人・亀田純蔵は、京都の名工、青木木米を訪ね、金沢での製陶を懇請しました。二ページでもふれましたが、それまでの百年余り加賀では硬質のやきものは生産できませんでした。そのため、藩民が用いる日用雑器は肥前や京都から大量に買入れ、藩金が流出したことから「国焼」が急務の課題となりました。木米は、適当な土があれば招請に応じると答えたため純蔵は九谷村の土を送り、木米を納得させたと伝えられています。翌年、木米は金沢卯辰山で瓦焼の窯を借りて九谷村の陶石や金沢茶臼山の土などで試焼したところ、九谷の古製を彷彿とさせる結果が得られました。そこでさらに翌年の文化四年（一八〇七）、木米は助工として本多貞吉を伴い再来し、金沢の春日山（現在の金沢市山の上町）での藩窯が実現しました。

厳密な開窯時期は一八〇五年の若杉窯のほうが早いのですが、春日山窯を再興九谷の最初とするのはこのような経緯によります。文献にある九谷の古製が何を指したのか非常に興味深いところですが、ここに紹介するような明時代末の様式を模した「呉須赤絵写」ではなかったことは確かでしょう。木米は二年足らずで京都に戻りましたが、春日山窯の呉須赤絵写が、その後加賀に赤絵の実り多い展開をもたらしました。

友の会 手続きが始まります！

三月一日（木）より、平成三十年度友の会新会員の募集、更新手続きが始まります。直接県立美術館でお手続きいただくか、郵便振替を利用し、お申し込みください。現在会員の方も、継続を希望される方は、更新の手続きをお願いします。

■有効期限／平成三十年四月一日～平成三十一年三月三十一日

■年会費／二〇〇〇円

■主な特典／

- コレクション展の無料観覧
- 企画展入場券進呈
- 企画展の開会式（開会式がない場合は初日）にご招待
- 入館料の割引
- 最新情報をお伝えする美術館だより（本誌）を毎月送付
- 館内カフェにてドリンクの割引

戌年にちなみ、明治期に活躍した彫刻家・石川光明の《犬》を使用します。
愛らしい二匹の子犬をぜひお手元に！

ご利用案内

コレクション展観覧料

一　般　360円（290円）
大学生　290円（230円）
高校生以下　無料
※（　）内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日（3月は5日）

今月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

3月の休館日は
22日（木）～25日（日）

広告
「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？
石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ
郵送配布!! 3,000部発行
ターゲットを狙った 知名度向上
県立美術館発行の 信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは ☎092-716-1401
株式会社ポープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第413号（毎月発行）
2018年3月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/